

④1 『窃盗犯になったミチ』

兎にかく慎重に登った。和田峠の頂に到るまでに一体何人の人に追い抜かれただろう。今はやっと登りきって、峠の茶屋で甘酒を飲み終えたところである。

ひたすら登りが続く道を、十三峠の難儀を繰り返すまいと、ゆっくりゆっくり歩いた。少し息が弾みそうになると立ち止まって呼吸が落ち着くのを待った。

お蔭で下諏訪宿との高低差二百五十丈余り(七六〇m)に登って全く疲れていなかった。あとは和田宿まで下るばかりである。

甘酒のお代を払って歩き始めたミチは、数件の茶店が並ぶ外れの、みすぼらしい小屋の前に差しかかった。

以前は同じ茶店を営んでいたらしい造りだが、修理の爲にたてよこ無秩序に打ちつけた木材が痛々しい。

通り過ぎかけて、開いた戸口の奥でしきりに手招きをするらしい人影が付いた。ミチを呼んでいるようだった。

引き返して近づいてみると、頭頂はすっかり禿げ上がって残りの伸びた白髪を後ろで束ねた一人の老人が、頼り無げに手をゆらゆら揺らし、すがるような表情でミチが近づくのを待っていた。

戸口に立って

「何か私にご用でしょうか？」と問うミチに老人は

「尼さんにお願ひがあります。家内が死んで十日になりませんが、まだお経をあげていませんのじや。お願ひだからお経をあげて下さらんか。そうでないと家内が成仏できません」と空気が漏れているらしい覚束ない口元で言った。

見ると、敷きっぱなしの夜具の先に小さな台があり、位牌らしいものが見える。ミチは、はてな？と思ひ老人に尋ねた。

「ご位牌があるようですが、お葬式はお済になったのではありませんか？」

「そりや何かの間違いじや。十日前に裏の山に葬ったがお経は上げとらん。お願ひじやからお経を上げて下さらんか。いまだに成仏してない証拠に、毎晩わしの枕元に出てきては、早う楽にしてくれと頼みよる」

そう言われると断るわけにも行かず、ワラジを解くと夜具の裾を回って小さな台の前に座った。十日前という割には可なり茶つぼく変色した位牌と、その前にべつ甲の櫛が一つ置いてあった。

擦り切れ、綿が覗いている小さな座布団もその前に置いてあった。

ミチは念の為に位牌を確かめた。乙巳(きのとみ)すえ 五十八歳没、と記されていた。

「すえ様と仰るのは奥様ではありませんか？八年前にお亡くなりなのですが」

「すえはわしの女房じやが八年前じゃない、十日前に死ん

だ。わしが穴を掘って葬った」

ミチは老人の説明をどう理解をすればよいのか戸惑った。ただど問答を繰り返しても仕方がないと考え、頼まれた通りお経をあげた。

お経を上げ終えたミチが立ち上がるうとすると、老人は位牌の前のべつ甲の櫛を取り上げ

「これで女房も成仏できるじゃろう。この櫛は、女房が若い時分から大事に使っておったが、もう用は無い。お布施の代わりに貰ってくれ」と差し出した。

その申し出に、ミチはまたしても戸惑った。粹筋が使っていたのではないか、と思われる螺鈿を施した見事な出来栄の櫛である。尼僧のミチには無縁の代物だった。

「私はご覧の通りの尼です。尼にべつ甲の櫛は不似合です。今まで通り奥様の分身とお思いになって、どうぞ大切にしてください」

「それじゃわしの気がすまん。黙って貰ってくれ」とミチの辞退を認めようとしなない。

気持ちだけ有難くいただく、というミチに老人は尚も執拗に櫛を渡そうとした。

観念したミチがしぶしぶ櫛を受け取ると、老人は安心をしたのか、歯が一本も残っていない歯茎をのぞかせ、にっと笑った。

実際ミチには、螺鈿で飾られた櫛など無用の長物以外の何

物でもない。

所持しているだけでもうとましく思えるに違いないその櫛を、ミチは両手に包み込むと、大袈裟に畳に付くまで頭を下げて礼を言い外に出た。

半刻余り歩いたところで、秋だというのに陽射しの強さに閉口して松の木陰をみつつけ暫く休むことにした。

やっと汗が引いたかな、と思ったところに若い男が近づいて来て

「妙なことを尋ねるが、峠で半ボケの爺さんと何か話をしなかつたかい？」と言った。

「お経をあげてくれと頼まれてお経をあげましたけど、何か？」

「その時に櫛を見なかつたかな？」

「見ましたよ。綺麗な螺鈿の櫛でした。お布施の代わりにと言って、くれようとするので困りました」

「それだよ。爺さん、尼に形見の櫛を盗まれた、誰かみつけて取返してくれと大騒ぎをしていたぜ。尼さんがそんな馬鹿なことをするはずがねえと言ったんだが、余りにうるさく言うもんで、四半刻まえの事ならすぐに追いつくだろうから、確かめてやると言って追って来たってわけだ。それじゃ、今その櫛は尼さん、あんたが持っているのだ」

「いいえ持っていません」

ミチは心臓が破裂するほど驚いた。いつの間にか泥棒にな

っていた。それも櫛を見て僅か一刻になるかならないかのことだった。

「何だつて？今貰ったつて言ったじゃないか」

「貰うには貰いましたが置いて来ました。余りに熱心なので、一旦受け取っておいて、お辞儀をする時に気付かれなように座布団の下に差し込んで返しておきました」

「そうだったのか。それでどうする。ボケ爺さんは櫛を渡して四半刻もしねえ内に、すっかり忘れて盗まれ盗まれたつて大騒ぎだが、ちゃんと返してあることを伝えないと」

「掃除をする時にでも気付くでしょう」

「あの爺さんが掃除なんかするようには見えないな。尼が、尼がって戸口で大騒ぎしてるんで何事かと思つて中を覗いてみたが、あの分じや布団だつて何か月も敷いたままだろうて。こうなりやあ乗りかかった船だ、おいらがちよいと引き返して爺さんに訳をはなして来らあ」

「それでは申し訳がありません。私が参ります」と言うミチを制すると男は、爺さんはえらく気が立っている。いきなり掴みかかつて来ないとも限らないので一緒に行く、と結局二人で再び峠まで引き返すことになった。

老人の小屋の前まで戻つたが肝心の爺さんの姿が無い。小屋の中を覗いた所で背後に女の声が出た。隣の茶屋の女主人だった。

「爺さんなら疲れてうちで寝てるよ。櫛はみつかったか

い？そうかい、尼さんにあげると言ったのかい。それを忘れてしまったつてことか。

十日前に死んだ？ああ、そりや爺さんの犬のことだ。女房と犬の死んだ日がごちやごちやになつてる。

あの櫛はね、亡くなつたすえさんが岡場所にいるのを、惚れた善六さんが、喰う物も喰わず死ぬ気で金を貯めて身請けした時に身に付けていたものらしいよ。今はまるでボケちまつているけど、爺さんにとつちや何よりも大切なものさ。

そう言えば、尼さんの顔立ちがすえさんにそっくりだ。善六爺さん、亡くなつた女房と尼さんの区別がつかなくなつていたんだよ、きつと」

惚れた女房と間違われたのなら仕方が無いか、とミチは苦笑するしかない峠越えだった。